

[illegible]

『遷座祭』

初夏の日差しの下、見上げるばかりの山車が、次々と大通りを練り歩いて行く。中でも一際見事な山車の頂きには、天照皇大神の人形が光り輝いていた。山車を取り巻く踊りの列では、豪華絢爛な衣装をまとった娘たちが、祭りを華やかに盛り上げる。沿道に溢れ返る大観衆からは、「日本一」の声が上がった。その中には、多くの外国人の姿も見える。町は、人々の歓声と熱気に包み込まれていた。

この光景は、明治三年の旧暦四月十四日に執り行われた、伊勢山皇大神宮遷座祭の姿である。伊勢神宮より勧請されたと伝わる古社を再興し、横浜総鎮守として祀るにあたり、神奈川県は五日間にわたる盛大な祭



よもの海
みなはらからと
思ふ世に
など波風の
たちさわぐらむ
明治天皇御製

創建 150 年記念事業



「本殿 地鎮祭」

礼を執り行った。その総費用は十五万両に及んだが、これを聞いた当時の外務卿（大臣）が、「外務省の半年の予算に匹敵する」と驚いたと伝わる。まさに日本一の規模の祭りであった。

当時の横浜は、急激な人口増加を遂げたが、その多くは様々な地域からの移住者であった為、住民同士の繋がりが薄く、同じ地域社会の一員という絆も弱かった。そこで神奈川県は、横浜の象徴となり、人々の心の拠り所となるものとして、当宮を創建したのである。

自分たちの守り神として、関東の伊勢神宮と呼ぶにふさわしい荘厳な社が築かれる。また、遷座祭では、日本一と呼ぶにふさわしい盛大な祭りが執り行われる。その喜びと興奮は、人々の心に「横浜市民」いう「誇り」を開花させた。我々は、東洋一の国際港、そ

して文明開化の先駆けの町の、市民であり担い手である。この「誇り」こそが、金港・港都とも称えられる、横浜の繁栄の礎となった。

神奈川県は、さらに当宮を伊勢神宮の「別宮」とするように政府へ願い出ていた。この願いは太政官（現在の内閣にあたる）で審議されるも、残念ながら叶わなかった。

それから間もなく百五十年の時が過ぎる。この度、創建百五十年の記念として、伊勢神宮の内宮より、正宮本殿に連なる西宝殿を賜り、当宮の新たな本殿として移築される。これは、当宮が横浜の総鎮守であることに対し、格別の御配慮を頂いた為であり、当宮だけではなく、横浜にとっても大変な栄誉であり、誇るべきことである。

創建 150 年記念事業



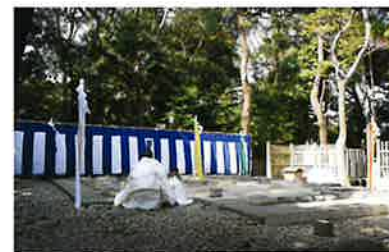
「本殿 地鎮祭」



物忌による地鎮の儀



創建 150 年記念事業



「本殿 地鎮祭」



物忌による地鎮の儀

『仮遷座祭』 (本殿→神楽殿)

平成 30 年 2 月 9 日 午後 6 時 斎行



本殿出御



布単簀道舗設



遷御



神楽殿入御



『遷座祭』 (神楽殿→本殿)

平成 30 年 10 月 1 日 斎行予定

旧本殿から神楽殿に御遷りなされた御霊代を、掘立柱と茅葺の神明造である新たな本殿へ御遷する、最も重要な祭儀です。

いにしえに伊勢より勧請されたと伝わる神霊が、新たに伊勢より遷される社殿へ鎮まる。当宮を「別宮」へと願った明治の人々の想いが、まるで形を変えて叶ったようでもある。また、神霊は新たな社殿へ遷座すること、力を若返らせ再生し、その神威を高める。明治という新たな時代の始まりに、創建の遷座が、新しい町であった横浜へ「誇り」をもたらした。そして改元を控えた平成三十年に、新本殿への遷座が、再び「誇り」を横浜にもたらす。総鎮守の神威がますます高まり、都市の隅々までを照らす中で、人々が「横浜市民」の「誇り」を強く胸に抱くならば、間もなく訪れる新たな御世は、横浜に更なる飛躍と繁栄を約束するはずである。

創建 150 年記念事業



「提灯屋形」竣工式

伊勢山皇大神宮 創建 150 年記念事業



当宮は明治3年に創建され平成32年に150年の慶賀を迎えます。

この度、伊勢神宮より譲与された社殿を移築する御本殿及び拝殿の建て替えを始めとした境内整備を取り進めております。

皆様からの赤誠をを賜りますようお願い申し上げます。

尚、記念事業奉賛会三級有効以上の方には「正月期間」「例祭」「新嘗祭」「節分祭」の際に提灯(名入)を掲げさせていただきます。